

お財布のかたちとおしゃれ

—江戸・明治期の袋物から—

2010年8月3日(火)～11月21日(日)

はじめに

財布は、お金のかたちや生活・文化に合わせて、変化してきました。ここでは、江戸時代から明治時代にかけて財布として使用された袋物(ふくろもの)や、財布が描かれた錦絵をご紹介します。当館所蔵のさまざまな袋物と錦絵を通して、財布にまつわる当時の文化や流行について感じていただければ幸いです。

【展示資料リスト】 前期：2010.8.3～10.3
後期：2010.10.5～11.21

■ お金と財布のうつりかわり

—江戸時代から明治時代へ—

○江戸時代

江戸時代には、小判や藩札などの紙幣を入れるため、巾着(きんちやく)のほかに、紙入(かみいれ)なども財布として使用されるようになった。それ以前は、お金(銭など)を燧袋(ひうちぶくろ)や巾着に入れていた。



財布として使われた巾着

(錦絵「役者絵 坂東彦三郎」より)



紙入

紙入は鼻紙袋ともよばれ、鼻紙や葉などを持ち歩くための布や革製の入れ物で、財布としても使用された。

口に巾着をくわえている。巾着は、お金などを入れて口を紐で縛る袋で、燧袋(火打石などをもち歩くための袋)から変化したものと考えられている。

○明治時代

明治時代には、新たに発行された紙幣や貨幣の形に合わせた財布がつくられるようになった。また、海外から財布をつくるための材料が輸入され、口金の付いた「がまぐち」が登場した。



札挟み(さつはさみ)

薄い板 2枚を紐でつないで、板の間に紙幣を挟み、紙幣が折れることを防いだ。



紙入(さついれ)

布で四角い袋状に作られている。明治初期に発行された紙幣がデザインされている。



がまぐち

口金のついた銭入れ。がまぐちの名前は、開けた口の形がガマガエルの口に似ていることに由来。

I お金と財布のうつりかわり —江戸時代から明治時代へ—

資料名	年代
鼻紙袋	江戸～明治時代
鼻紙差し	江戸～明治時代
文政小判・文政一分金	江戸時代
文政真文二分金	江戸時代
天保一分銀・嘉永一朱銀	江戸時代
天保通宝・寛永通宝	江戸時代
大和郡山藩札 銀1匁	江戸時代
摂津麻田藩札 銀10匁	江戸時代
札挟み	明治時代
札入	明治時代
がまぐち	明治時代
太政官札 一分札	明治時代
新紙幣明治通宝札 半圓紙幣	明治時代
1圓旧金貨	明治時代
5銭銀貨	明治時代
半銭銅貨・1厘銅貨	明治時代

II 懐に入れる財布 —紙入—

三徳	江戸～明治時代
鼻紙差し	江戸～明治時代
どんぶり	江戸～明治時代
箱迫型	江戸～明治時代
箱迫	江戸～明治時代

III いろいろな財布① —錦絵—(壁面)

芝居絵	1879(明治12)年
役者絵 市川團十郎	江戸時代末期～明治時代初期
教訓善悪小僧揃	1857(安政4)年正月
直賜泉大町 越前屋忠兵衛引札	明治時代初期
芝居絵	1852(嘉永5)年
豊国漫画図絵 岩淵弥七	1860(万延元)年
芝居絵(与三と安)	1853(嘉永6)年
富国歩み初メ	1880(明治13)年

IV いろいろな財布②

袂落し	江戸～明治時代
胴乱	江戸～明治時代
早道	江戸～明治時代
折りたたみ式	江戸～明治時代
合才	江戸～明治時代

V 財布にみるおしゃれ

がっくり型(布製)	江戸～明治時代
二つ折(布製)	江戸～明治時代
三徳(布製)	江戸～明治時代
三つ折三徳(布製)	江戸～明治時代
二つ折(布製)	江戸～明治時代
二見型(布製)	江戸～明治時代
鼻紙差し(藤製)	江戸～明治時代
胴乱(革製)	江戸～明治時代
がっくり三徳(革・布製)	江戸～明治時代

VI 描かれたさまざまな財布 —錦絵—(壁面)

東京日々新聞 八百六十号	1874(明治7)年
金近着緒締善玉	1860(万延元)年
鯉舞々の洒落	江戸時代末期
東京日々新聞 八百五十六号	1874(明治7)年
役者絵 坂東彦三郎	江戸時代末期
当時流好諸噺商人尽 山くじら	江戸時代末期

■懐に入れる財布－紙入－

紙入は鼻紙袋ともよばれ、鼻紙などを入れる懐中用の袋物であったが、江戸時代に財布として使われるようになった。人々の好みの変化などにより、紙入のかたちには流行があり、「鼻紙袋」から「三徳」、「鼻紙差し」、「どんぶり」などへと少しずつかたちを変え、かたちの違いによる名前が付けられた。



三徳(さんとく)



鼻紙差し

鼻紙差しは、三徳の流行後に出てきた紙入の一種で、前後に楊枝、鏡、中央に紙など身近な品を入れやすかった。



紙入からおひねり(紙に包んだお金)を出す様子 (錦絵「芝居絵」より)



三徳は、紙入の一種で、お金のほかに、書付や楊枝、紙も入れることができた。

←開いた三徳



どんぶり

どんぶりは、安永年間末から天明年間にかけて流行した大きな紙入。随筆『賤のをだ巻』によれば、お金や小物を入れ、これ一つで事足りたため、どんぶり(丼)と呼ばれたことがわかる。



箱迫型

(参考展示) 箱迫

箱迫型(はこせこがた)

箱迫型は、箱迫の形をした小型の袋物。箱迫は、紙入から変化したもので、大名や旗本などの武家の女性が、お金や懐紙、鏡、紅などを入れ、外出時に持ち歩いた。

■いろいろな財布

胴乱(どうらん)

煙草入れや印籠のように、根付などで腰に提げた。筒卵、銃卵ともよばれ、最初鉄砲の弾丸入れとして用いられたが、後に銭や薬を入れるようになった。



袂落とし (たもととし)

2つの袋に鎖や紐をつけ、肩から左右の袖の内側に垂らして持ち歩いた。煙草入れとして使用されることが多かった。

早道(はやみち)

胴乱より小型で銭入れとして使用された。元禄期に佩物(おびもの、腰に提げる袋など)の業者によりつくられたと考えられる。



簡素な財布

江戸時代から布製の簡素な財布も使用されるようになり、明治時代以降も引き続き使用された。口が一つで、小物などを分けて入れるポケット(脇入)がなく、幾つかに折りたためる。

■財布にみるおしゃれ

財布には、流行を取り入れながら、錦やピロードなど当時高級だった織物のほか、籐や革などを素材として使用し、前金具や鎖など細部にまでこだわった、おしゃれなものもあった。



綴錦



籐



金唐革

【財布に使用された素材の例】

つづれにしき 綴錦	錦の一種で金糸や銀糸や数種の色糸で色の変化やぼかしを表現したもの。錦は高価な絹物の代表とされた。
きんらん 金襴	錦地に金糸で模様を織り込んだ織物。
しゅう 刺繍	刺繍のなかで、縫いつぶしは生地全面に刺繍したもの、散縫(ばらぬい)は生地面を残して刺繍したものをいう。
さらさ 更紗	木綿地に人物、鳥獣、草花などを幾何学的な模様で染め出したもの。インドやインドネシア、タイなどから伝えられた。
ピロード	ピロードは表面を毛羽立たせた滑らかで光沢がある毛・絹・綿の織物。15-16世紀にヨーロッパからもたらされた。
らしゃ 羅紗	羊毛で密につくられた厚めの毛織物。室町時代から羽織などに使用された。
とう 籐	籐はヤシ科のつる性の植物。茎が強く家具にも使われた。
きんからかわ 金唐革	革に金属箔を貼り、模様をプレスし彩色を施したもの。

■描かれたさまざまな財布

当館で所蔵している錦絵の中から財布の描かれた錦絵をご紹介します。



置賜県大町 越前屋忠兵衛引札 明治初期 絵師不明

小間物屋の広告。右側に取扱商品として、「紙入類」、「金入るゐ(類)」、「札入類」、「銭入るゐ(類)」、「巾着類」など、財布として使われた袋物が書かれている。同じく袋物である「煙草入類」は、革、紙、織物、縫い物、毛織りなどの素材により分けられている。

江戸時代に財布はどこで売られていた？

財布は、江戸時代、小間物屋あるいは「袋物所」などで売られていた。

袋物は江戸土産としても買い求められた。江戸時代の江戸ショッピングガイドともいえる『江戸買物独案内』(1824年)には「袋物」「小間物」など袋物を扱う店が100軒以上掲載されている。

■幕末頃の財布の値段の一例

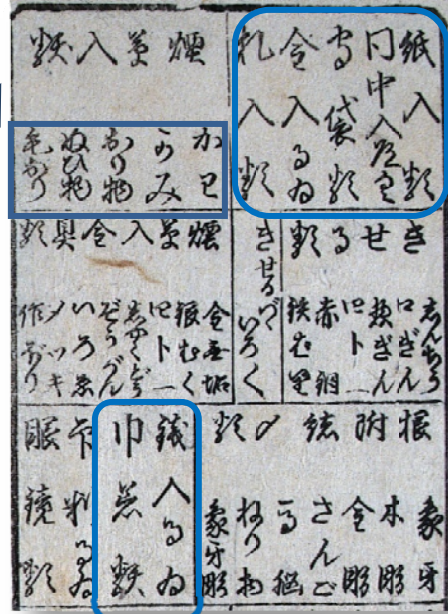
銭巾着 372文(1850年)

紙入 1分2朱 148文(1855年)

上野国原之郷村船津家史料「家財歳時記」
高橋敏『近世村落生活文化序説』(1990年、未来社)より

参考: そば1杯16文 (江戸後期の事例)

江戸後期(1842年)の公定相場を前提とすると1分2朱は約2400文。



富国歩ミ初メ 1880年 佐田翠眼

「ドウラン」、「ガマガチ」、「皮ノ紙入」、「キレの紙入」など、財布として使われた各種の袋物が描かれている。



役者絵

江戸末期~明治初期 絵師不明
市川團十郎演じる与三が懐の紙入から小判を出す場面。



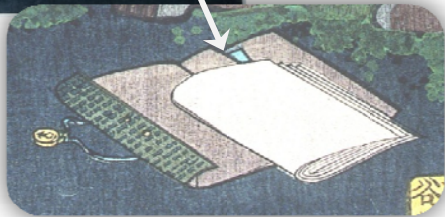
教訓善悪小僧揃 1857年 一勇斎国芳

紙入とこぼれ落ちた小判などが描かれている(「落ちて有物をひろはぬ小僧」)。



芝居絵 1879年 豊原国周

尾上菊五郎演じる恵府林の助(右)が紙入からお札を出して、岩井小紫演じるおむら(前中央)に渡す場面。



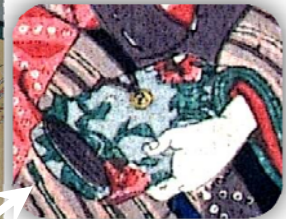
豊国漫画図絵 岩淵弥七
1860年 豊国
紙入から抜いた小判を右手に持っている。



芝居絵
1853年 豊国
与三が懐の紙入から小判を出す場面。



当時流好諸喰商人尽 山くじら
江戸末期 絵師不明
山くじら(イノシシの肉)の店で、客が財布を取り出している。



金近着結締善玉
1860年 芳幾
右端の男性の手と、左端の男性の懐に紙入。



東京日々新聞
八百六十号
1874年 芳幾
(楠公権助論を続ける
朝野新聞への
皮肉めいた記事)
権助が巾着(財布)を
手にしている姿が描か
れている。



東京日々新聞
八百五十六号
1874年 芳幾
(相撲取小柳常吉
詐欺に遇う)
相撲取の前に座る人物
(詐欺師か)が、巾着に
手を入れている。



※「楠公権助論」…福沢諭吉が『学問のすすめ』において、赤穂義士や楠木正成の討ち死には、主人の金をなくして首くりをした人物である権助の死と同等、としたことから、物議を醸し新聞などで論争となった。

鯨舞々の洒落
江戸末期 絵師不明

鯨に紐をつけて猿廻しのように芸をさせ、金持(左)が巾着から祝儀を取り出している。鯨を廻している者(右)の足元にも巾着と小判が描かれている。



日本銀行金融研究所
貨幣博物館
電話: 03-3277-3037(直通)
〒103-0021
東京都中央区日本橋本石町 1-3-1
<http://www.imes.boj.or.jp/cm>